第1回 日本建築士会連合会 建築作品賞

審査総評

片山和俊 審査会委員長

第1回 日本建築士会連合会 建築作品賞の選定結果について、ご報告致します。

本賞は従来の「連合会賞」から、新たに「建築作品賞」として創設され、令和2年春に募集し審査表彰する予定でした。が、昨年来の新型コロナ感染拡大の影響から選定作業の中断と1年延期を余儀なくされました。本年審査を再開し、このたび無事終えることができましたので、ここに選定結果のご報告をさせていただきます。審査が2年に亘り、応募された皆様にはご迷惑をお掛けしましたが、事情をご理解いただきたく思います。

今回は、応募総数275作品という多きにのぼりました。詳細は別紙によりますが、カテゴリー別の特徴としましては「I-1 居住・生活空間系の建物」数が117作品と突出して多く、「I-3 教育・文化・福祉系の建物」が73作品と続きました。また「II リノベーション」35作品、U40対象者87名を数え、「建築作品賞」創設という新たな試みが応募作品数に表れたように思われます。

審査では、カテゴリー別作品数と賞数のバランスを図る上から、点数が少なく用途上問題ないと判断した11作品の「I-4 その他」と、39作品の「I-2 商業・業務・交通の建物」とを同一カテゴリーとし、また「I-3系」の応募ながら「II リノベーション」ともみなしうる作品は、応募者の意思を尊重しそのままのカテゴリーでの審査としました。選定作業は、提出された応募資料により各カテゴリーの10%を目安に選定し、総数27作品を現地審査対象としました。けれども昨年7〜8月時の新型コロナ感染拡大の状況から、そこで中断・延期することとしました。

審査を再開した本年6月より、審査委員による現地審査（複数名以上）を行いました。が、現地審査にはコロナ感染拡大の影響がありました。平時に比べ全体に現地審査日程を組む難しさがあり、中には現地審査が行えない作品や、審査に行っても内部に入れない場合もありました。また現地審査時に、応募者の陽性が直前に判明しリモート参加になるなど、思わぬ事態も起きました。最終的に現地審査ができなかった4作品は、提出いただいた映像資料により審査を進めました。

最終審査会は、はじめに応募要項とこれまでの審査・選定作業と進め方の検討を行い、その中で今回応募数の多かった「新築 I-1 居住・生活空間系の建物」の奨励賞の数を増やすこととしました。また「I-4 その他」は前回区分を踏襲し「I-2 商業・業務・交通の建物」と同一カテゴリーとしました。この「I-4 その他」については応募要項自体の見直しが必要ではないかと思います。

選定は、審査委員による現地審査講評を加えながらカテゴリー別に投票と意見交換を行い、各賞を決定しました。4カテゴリーの選定後に、U40と大賞の選定を投票と意見交換により行い、大賞には「新築 I-1居住・生活空間系の建物」の作品「大地の家」を選定しました。この作品は小規模ながらも、審査当初から設計を志す者の魂を揺さぶるような魅力を放っていましたが、現地審査を経ての評価も高く、審査員全員一致して大賞に決しました。U40は「上池台の住宅」と「東京藝術大学 国際藝術リソースセンター」が選ばれました。個人、組織事務所らしい仕事ぶりが票を分けた感じですが、共に設計の深度に拘る姿勢に共感を覚えました。

最後に、この審査を通じて〝小さな地域の力〟が垣間見られたように思います。従来の設計という枠を超えて、より自由で能動的な建築設計者の活動と、共に歩むさまざまな分野の専門家、施主や利用者（住民）たちの姿がありました。それを〝小さな地域の力〟と呼ぶとしますと、その胎動を感じた審査であったと思います。今回は、どのカテゴリーにも力作が並び難しい選定作業でしたが、同時にこれからが楽しみな建築作品賞であったと思います。